
ANGEL BLOOD

バイパー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANGEL BLOOD

【Nコード】

N7000B

【作者名】

バイパー

【あらすじ】

舞台は異世界。アウトローな天使、バイパーを中心とした戦有り笑い有りな物語。そんな彼を待ち受けるものとは…！

第1話＋バイパー（前書き）

天界に住む天使、バイパー。

ある悪魔との出会いがきっかけで水の惑星エデンに降り立ちます。

全てはは銃のみぞ知る…

第1話†バイパー

ザッザッザッザッ……！

『グヘヘッ！手負いのドミニオンがこんなどこにもいたぜ！ゲヒヒヒヤッ！』

『死、ねえ！……えっ？』

パァン！

手負いと油断した下級悪魔は、相棒【DEVIL KILLER】に額を打ち抜かれ呆気なく絶命した。

『ボケが…このオレがテメエなんぞに殺られるもんかよ。にしても、ちよいと手痛くやられたな…』

天使と悪魔の、永遠とも言える闘いにとりあえず参戦していたオレは、魔王クラスの悪魔に間違って遭遇しちまってな…ボロボロにされて、今は瓦礫の上で座ってるワケさ。

『痛てて…四大セラフは一体何やってやがるんだ。この辺は…っと！悪魔がっ！随分多いな！オラァ！』

手負いのオレに襲い来る下級悪魔共の額に風穴を開けつつ、ヨロリと立ち上がる。

『ここに居てもキリがねえ。確かこの辺にはアジトがあったハズだな！よし、しゅっぱあつ！』

ズボンについた埃をほろりと、オレはアジトに向かって元気に駆け出した。

そうそう、オレの名前はバイパー。ドミニオンクラスのイカした天使だ。それから数分でアジトに着いたオレは、相棒の銃【DEVILKILLER】の手入れをしていた。先の戦いで受けた傷は、天使の復元能力ですっかり回復している。

『よし！ピカピカだぜ！…………おい誰だ！』

気配に気付いたオレは、その方向に銃を向ける。

『……………』

両手を挙げて出てきたのは、服装はボロボロで、肌は傷だらけだが気品溢れる女だった…それも悪魔のな…。

『んで、オレ様のアジトで一体何やってやがる。場合によっちゃあ、そのまま殺す。それと名前は？』

女の悪魔は、暫く黙り続けていたが、話始めた。

『アンタ天使にしては珍しいねえ。アタシを見てすぐ撃たないなんて』

『いいからさっさとオレの問いに答えやがれ。蜂の巣にされたいか？』

両手を挙げたままの女はクスリと笑った。

『アタシはエア―。見ての通り悪魔さ。天使との戦いで傷ついてね、たまたま此処にたどり着いたのさ。アンタは？』

『……………』

オレも同じような理由なんで、少し黙ってしまった。

『銃の手入れをしてたところだ。』

ぶっきらぼうにそう言うと、銃をチラつかせた。

『そのアンタの銃、アタシの【ANGEL KILLER】とよく似てるね。』

オレの表情が固まった。

第2話＋双子の銃と天使と悪魔

『ANGEL KILLERだと！？オイ、そいつの作者は誰だ！』

『ミス・グレイス』

身体から血が退いていくとはこの事なのだろうか。

ミス・グレイス：かなりの婆さんだが、オレに特製の銃【DEVIL KILLER】をくれたとても有り難い天使だ。

だが、何故天使のグレイス婆さんが【ANGEL KILLER】なんてモノ：しかも、それが悪魔の手に：

『あ、先に言っとくけど、アタシは脅迫もしてないし、誰かのを殺して奪ったわけでもないからね。ミス・グレイスがアタシに作ってくれたんだよ。彼女がこれを作った後、どこに行ったのかはわからないけどね。』

悪魔の言う事は信じられねえが、全くの嘘とは考えにくい：それにしても何故グレイス婆さんが：

『そういえばアンタ、撃たないのかい？敵の悪魔がここに居るんだよ。手負いを殺すなら今だろう？』

『じゃあ、何故オマエはオレを撃たない？スキならいくらでもあっただろ。それに――手負いを殺すのはオレの美学に反するんでな』
妖しく笑うエアーに、オレは鼻で笑ってお返えした。

『アタシも同じさ。それにミス・グレイスに銃を作ってもらった男なんだ。相当な使い手なんだろ？お互い万全な状態で殺り合いたい

もんだね』

なんて女だ。ま、そんな女は嫌いじゃないがね。もっとも、悪魔じゃなかったら…な？ 会話が途切れ、オレは再び銃を磨き始めた。ヤツは今は絶対に攻撃してこない。何故かわかるんだ。

と……

『此処は悪魔と天使の臭いがするナ。どいつもこいつも殺ス！』

オレ様のイカしたアジトにズカズカと入って来やがったのは、右腕全体が黒い刃、左腕がガトリングのようなものが付いていて、まあ人型だが異様な気配を感じる。

『オイ、アンタ。人のアジトにずけずけと入ってきやがって。言っとくが、ここは喫茶店じゃねえぞ？ コーヒーの代わりに銃弾は如何かな？』

オレはそう言うと同時に、謎の来訪者に銃を向ける。

『アンタ：その様子だと、異形の者を相手にしたことがないみたいだね。そいつは意思を持たない。天使でも悪魔でもない。見境無く襲ってくる、アナザーエネミーさ』

アナザーエネミー：噂には聞いた事がある。が、見たのは初めてだ。

『殺ス。天使も悪魔も』

オレの冗談をシカトした異形の者は一言言くと、オレの方へと右腕を振り上げ走って来た。

オレは右へ跳び、ヤツの斬撃をかわす。大振りの斬撃が外れ、お気に入りのテーブルを真っ二つにしゃがったが、ブレードが地面に

めりこんで外れない。コイツはバカか？

ヤツを警戒しながらチラッとエアーを見ると、呑気に銃を磨いてやる。

『チィッ！ちよつとでも期待したオレがバカだったようだぜ！』

銃を構えヤツの額の下真ん中に弾を撃ち込む。確実にヤツの額に風穴を開けた筈だったが、ヤツはオイルやら何やらを垂らしながらこちらを向くと、地に刺さったブレードを抜き、再び走って来た。

『おいマジかよ！チィッ！』

走って来たヤツのブレードの接続部分に銃を三発程命中させ、その機能を停止させる。

『殺ス：ガガッ』

右腕が機能しないので、ヤツは左腕のガトリングを構える。しかし突然ヤツの左肩から先が吹き飛び、ついに両腕が使えなくなった。

『モタモタ闘ってんじゃないよ。早くトドメ刺しな』

エアーだ。オレはノイズ音を出しながらも、まだこちらに向かってくるヤツに向かって、霊子エネルギーを集中させた弾を打つ。

弾は見事にヤツの胸に当たり、跡形も無く消滅した。

『チッ：悪魔といえど、オマエには借りが出来たな。』

『アタシ達悪魔と天使との闘いに、このアナザーエネミーという第三勢力紛いの存在は邪魔で仕方がないんだよ。アタシはこいつ等を潰そうと思ってる。だからアンタも手伝いなさい？それで貸しはチャラにしてあげるわ』

無茶苦茶だ。

まあ、エア―には一応借りが出来ちまったわけだし、コイツとの決闘はアナザーエネミーを滅ぼした後でも遅くはねえか。見た目は悪魔だが、悪いヤツじゃなさそうだし。

『わかった、協力するぜ。オレはバイパーだ。ヨロシクな』

第2話＋双子の銃と天使と悪魔（後書き）

疲れました（笑）駄文ですが読んで貰えれば光栄です。

第3話　水の惑星

アジトに現れたアナザーエネミーを見事に倒し、コイツらを滅ぼすと決めたオレ達は、アナザーエネミーに関する情報を調べるうち、見境無く殺戮を繰り返すアナザーエネミーの撃退を中心に活動するギルドが、水の惑星エデンにあるという情報をキャッチした。それからすぐにアジトに設置してある転送装置を使い、エデンへと向かったのだった。

『ところでバイパー、羽根をしまえるかい？アタシ等はとりあえず人間のフリをして、エデンにあるギルドに登録するよ。天使と悪魔が降り立ったとなると、色々めんどろになりかねないからね』

夕日のオレンジを背にエデンに降り立つと、エアーが突然言った。今まで羽根なんて今までしまった事ねえが、まあ仕方が無いか。確かに無駄なゴタゴタは避けたいしな。

二人は羽根をしまうと、沈み行く夕暮れの道を歩き出した。

暫く歩き、見えてきたのはごく普通の町。もうすっかり陽が落ち、店の明かりが目立っている。とりあえず宿を見つけたためにホテル探しに歩く。町行く人達は、オレ達の事など気にも留めていない様だ。羽根が有るか無いかで、人間の反応はこうも違うものか。そう思うと笑えてくる。

『さ、見えてきたよ…って聞いている？』

エアーに言われハッと我に帰ると、ホテルが見えてきた。少し古めだが泊まるには十分なので、今日はここで休む事にした。『いらっしやいませ。そんなボロボロな服着て…さぞかし長旅の様子で一泊でいいのかい？』

『おう、ああそれとこっちは別々の部屋にしてくれよな』

『あら？意外とガードが固いのね』

エアーは肩を竦めながら言う。二人のやりとりを不思議そうに見つめるフロントから鍵を受け取り、オレは部屋に向かった。一方エアーは、買いた物があると言いつこかへ行つてしまった。まあオレには関係無いがね。

番号を確認して部屋に入つたオレは椅子に座り、日課である銃の手入れを始めた。

『成り行きとはいえ…まさか悪魔と共に行動する事になろうたあな…』

オレが部屋でブツブツ言いながら銃の手入れをしていると、ノックもせずに誰かが入つて来た。ハゲの次は一体だれだよ。

入つて来たのは黒いライダースーツに身を包んだ女。金色のサラサラな髪が腰まで伸びていて瞳は紅。色白な肌にピンクのルージュが目立つ。スレンダーな体つきで、身長は175cm程。腰にはホルスター…ホルスター？

『ああ、よく見りやエアーじゃねえか。何だそのカッコは？認識するのに時間かつたぜ』

『もしかして悪魔に魅了されかけた？それより、アンタはそんなボロなカッコでギルドへ行くつもりかい？』

そう言つてエアーが持つて来たのは、大きめの紙袋。

『見た目のサイズで服を買つてきたよ。シンプルだけど、今のその服よりはマシだろう？それじゃ、アタシは部屋に戻るよ』

『お…おう。サンキュ…』

戸惑うオレに紙袋を渡すと、エアーは部屋へと戻つて行つた。中を覗くと黒いカットシャツと、黒いレザールのパンツが入つてい

る。ベッドのそばに紙袋を置き、改めて自分の服装を見してみる。確かに今の服装はヤバイ。破けてるわ汚れてるわ血痕があるわで最悪だ。銃の手入れを終えると、服を脱ぎ捨てシャワーを浴びる。

『意外と気の利くヤツなんだな：アイツ』

気付けば、部屋に入ってきた時のエアーの事を考えていた。

天使だから。

悪魔だから。

人間だから。

亜人だから。

これだけで全て決めちまってもいいんだろうか？エアーを見terと、そんな事を考えちまう。会ってまだ一日も経っちゃいないが。

『ガラにもねえ！』

オレは頭をブンブン振ると、シャワーを一気に冷水にする。

『ギャー！冷てええええっ！』

第4話＋偽りの支配者

翌朝：オレはエアーが買ってきた服を着て部屋を出る。

『あら、意外に似合ってるじゃない？で、これからギルドまで向かうわけだけど、ここから歩いてすぐだよ。』

エアーはブロンドの髪を指でクルクルと絡ませながら言った。ギルドの場所は、昨日買い物に出掛けた時に探したらしい。行き当たりばったりのオレとは違って、なかなかやるじゃんか。

『ケッ！悪魔に褒められても全然嬉しかねえが：まあ、サンキュな』
頬を掻きながら言うのと、悪魔って言葉に反応したフロントの男が目を白黒させる。

『お、お客様っ、あああ悪魔って！』

『あ：アレだ。悪魔っていうのは、ホラ、魔性の女って言うだろ？それと同じ様なもんだ！あはっあはははは！』

何故エアーを弁護しなきゃならんのかわからないけど、まあフロントの兄ちゃんも納得したみたいだから良しとするか。エアーのじとつとした視線が気になるが、オレ達はホテルをチェックアウトし、ギルドへ向かうのだった。

『：あのねえ、確かにアタシは悪魔だけど魔性の女じゃないの。わかる？悪魔にも一途な子もいるんだから。あまり偏見を持たないでくれるかい？』

『へいへい、そいつあ悪うござんしたねえ。んじゃナニか？自分は一途だって言いてえのか？わはは！』

『五月蠅い男ね…アタシが一途じゃいけないワケ？』

そんな事を喋りながら歩いてると、遂にエデンいちデカイと言われているギルドが見えてきた。しかし、デカイと言われてはいるが建物自体はそこまで大きくない。それどころか小さな飲み屋程度の規模だ。

『なあ、ホントにここなのかよ？聞いていた情報にしては…小さくねえか？』

オレが恐る恐るエアーに問うと、彼女は手のひらで額を押さえながらギルドの看板を指差す。

《エデンいち……デカイギルド》

看板の一部が掠れていて読みにくい。オレは近くまで行ってよく掠れている字を読んでみる。

『エデンいち……態度がデカイギルドお！？クソじゃねえか！まんまと騙されちまった！こうなりやヤケだ！おい、行くぞエアー！』

肩を竦めるエアーを背に、オレはイライラしながらドアを蹴り開けた。

ギルドの中、奥のカウンターには、成程態度が如何にもデカそうなゴツイ男が座っていた。顔は傷だらけで、周りの椅子には戦い慣れた様に見える人間の戦士達。静かに酒を呑む者、黙々と武器の手

入れをする者、下品な話で盛り上がっている者、武勇伝を聴かせている者等様々だ。オレはズカズカとカウンターへ向かう。周りから受ける好奇の視線なんて気にしねえぜ。

『おいオッサン、何がエデンいち態度がデカイギルドだ！なめんな！せっかくここまで来たんだ。それなりの情報はあるんだろうな？ええ！？もし無いってんならお前を直ぐに蜂の巣にしてやるからな！脳漿やら血やらを噴き出しながら死んでゆけ！おっ！エアー、ナイスだ！このボロっちい建物をこんがり焼いてやるッ！おいどうなんだ？言ってみろコラあぁっ！』

オレは早口で、グツグツと煮えたぎる胸の内をぶちまけたが、ヤツは気にもせずにタバコの煙をオレの顔に吹きかける。この野郎：そこまで今すぐ穴だらけにされたいのかよ。

『その様子だと：お前さん達、変な情報掴んじまったな？いるんだよなあ偶にそういう奴。ま、情報を何でも鵜呑みにやしないこった。それに、ここに来た奴を

「はいそうですか」ってウチに入れるワケにはいかねえんだよなあ』

男はめんどくさそうに言うのと、あくびをしながら手をひらひらする。帰んなボーヤと言いたいのだろう。周りの奴等はオレ達を見てはクスクス笑ってやがる。バカにしやがってえ！

『おいオッサン、じゃあどうしたら入れるんだ？』

オレはゴツイ男を思いっきり睨みつけながら言った。チラッとエアーを見ると、空いているテーブルに寄り掛かって欠伸をしていた。気楽だなあオイ。

『うーん、そうだなあ…おい！おめえら！この何もわかつちやいな
いボーヤ達にウチのシキタリを教えてやれや！』

マスターはパチンと指を鳴らす。すると、何やら奥から黒いフー
ドを深く被った奴等がゾロゾロ五人集まって来た。ソイツらは一氣
に剣を抜き、オレに対峙する。どうやらエアーには見向きもしてい
ないようだ。

『マスター、まだ坊やだぞ？殺しちゃってもいいのか？』

『マスターがやれって言ってんだ。構わねえよ』

『彼が127人目の犠牲者か…』

『早く殺ラセロ』

『私は子供を殺すのは趣味じゃないのですが…』

それぞれが何やら喋っていると、マスターが片手を挙げ注目させる。

『ボーヤ。コイツ等を全員戦闘不能にさせる事が出来れば入会を認
める。殺しても構わん。コイツ等もお前さんを殺しにかかるからな。
始めイッ！』

合図を聞いた戦士達は、この狭い店内で一氣にオレの方へと飛び
掛かってきた。脇にどけた客達の歓声が巻き起こる。

『そんなワケで悪いなボーヤ！死ねよ！』

そいつは剣を横に構え走ってきた。オレは瞬時に銃を抜き、男の

右肩を撃つ。弾は正確に命中し、悲鳴を上げ転がり回る男の左肩にも弾を撃つと、両肩から鮮血を吹出しながら気絶した。

『これで一人。あっけねえな』

オレは嘲笑いながら唾を吐きかける。両脇から迫ってきた二人もスキだらけなので、早打ちで二人の両太股に風穴を開ける。二人はもんどりうって倒れ、うめきながらもがいている。

『三人。弱えな。イラついてんだから、楽しませてくれよ』

『死ネ!』

斧を持つ四人目は後ろから飛び掛かって来たが、オレはくると振り向き、斧を銃身で受け止める。一瞬の硬直のスキに脇腹に蹴りを入れ、よろめいたところを側頭部に拳を叩きこむ。カタコトの四人目は、斧を落としてそのまま崩れ落ちた。

『ふむ、子供のクセにやりますねえ。では、行きますよ?』

五人目はフードを脱いだ。割と美形の優男。ソイツは細身の剣を片手に、こちらの様子を伺っている。ちょっとは楽しめそうだな?

バン!

後ろから何かがおレの頬を掠めて、優男の心臓にソレが直撃する。

『かつ……ガハッ……?』

優男は何一つ出来ないまま、血を大量に吐き倒れ、痙攣しながら絶命した。

『バカな男。相手は一人じゃないって知らなかったのかねえ。ねえ、バイパー？』

思わぬエアアの援護射撃にオレは鼻で笑う。話を聞くと、どうやら暇だったのでテーブルにあったナイフを投げたらしい。

『これで5人。あつと言う間だな。暇潰しにもなりやしねえよ。』

倒れている5人を見渡した後、マスターを見据えた。周りからは盛大な拍手や歓声上がる。うーん、気持ちいいぜ。

『合格だな。マスター、そろそろいいでしょ？このままだと次は俺がやられかねえよ』

オレ達は頭にハテナを浮かべながら周りをキョロキョロする。つまりこいつは偽物ってワケか？じゃあ本物はどこにいるんだろうか。

『イテテ：ああケン、わざわざ代わりをやらせて悪かったな。おい、誰か救急箱持ってきてくれないか！』

本物のマスターは、黒いフード五人衆の一人。オレに太股をブチ抜かれた片方だ。間違っって頭に穴開いてたらどうするつもりだったんだろうか？

『いやあ、それにしても君達は強いな。彼のように心臓をやられてたら、今頃ギルドは終わってたよ。なはは！いてて…』

マスターは太股を手早く治療さてフードを脱ぐと、ケンの肩を借りて立ち上がった。

『オレが本物のマスター、ロッキー・ブラフマーだ。君達の力を試す為に騙していた事を許して欲しい。おい！手の空いてるスタッフで、生きている者には治療を。死んでいる者は埋葬しろ。で…ここに来たということは、A E (Another Enemy) の件だな？』

ケンに連れられて、ロッキーはカウンターに座る。顔には無数のキズがあり、青い瞳の片方は斬撃によってその機能は失っている。少し年老いてはいるが、人間の中ではかなりの強さだろう。周りにいたギャラリーは、テーブルに戻って再び賑わっていた。

『流石話が早いわね。で、マスター、A Eの情報…というより奴等の本拠地はどこにあるの？』

『残念だがそれは知らん』

え？マジかよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7000b/>

ANGEL BLOOD

2010年12月31日02時19分発行